

きらら新聞 35



「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそしむ」

2007 年

5 月 15 日

発行 キララ新聞社
発行責任者 秋山 眞兄
山梨県北州市白州町横手 2259
白州郷牧場内
TEL:0551-35-0131・4520
FAX:0551-35-0132

野の知・学との出会い

ー尾崎喜八を思いつつー

ゴールデンウィーク直前の 1 日、西上州の山を歩いてきた。歩くといっても、数十年前の冬にテントを担いで縦走した 4 つの山を、今回は林道を車で移動しながらの山登りである。それぞれの上り口に車を置いて、東御荷鉾山（東みかぼ山）1 時間 40 分、西御荷鉾山 1 時間、オドケ山 25 分、赤久縄山 30 分という上り下りであった。その途中で尾崎喜八の詩碑「父不見 御荷鉾も見えず 神流川／星ばかりなる 万場の泊り」と出会い、感慨深いものがあった。

高校時代にひょんなことから、山と文学の雑誌として人気のあった『アルプ』（編集主幹：串田孫一。書名は尾崎喜八が名付け親）の集まりに顔をだすようになった。ヤクザチックに見える辻まこと（ダダイスト辻潤と大杉栄と一緒に虐殺されたアナキスト伊藤野枝の息子）とエゲレス紳士然とした尾崎喜八が、楽しそうに詩や山や博物誌のことを話すのを眺め聞きながら、こんな大人の世界があるものだと思ひ入り込んだのである。中学中途退学の辻まこと、商業中学卒の尾崎喜八たちの博識というか、物事への洞察力というか、その知力は独学で獲得したものである。高校生の私は、学校で触れる「知」「学」とは異なる切り口、語り口に惹かれたのである。

親父の書棚にあったヘルマンヘッセ全集を読んだり、山岳文学本を買いあさったりした

のも尾崎喜八とその仲間たちの影響である。これもひょんなことから、家族を持ってから夏は長野県富士見で過ごすことが始まったが、詩人・尾崎喜八の最盛期ともいえるのが富士見に滞在した 7 年間であったということも、私の富士見通いに影響している。

若いときに買いあさった尾崎喜八、辻まこと、串田孫一をはじめとする山岳文学や山岳紀行の書物は、富士見の押入れに入れられたまま、もうかなりの年月が経ってしまった。西上州の林道脇にひっそり立っていた尾崎の詩碑と出会ったとき、久しぶりに彼らの書物を手にしてみたいという気持ちにもなった。しかし、同時に、彼らの書物を味わい、心を自由に遊ばせることができるような時ではない、という思いにもなった。

公教育の場で触れる知・学は極めて危うい事態になっている。あまりに教師を萎縮させる力が強すぎる結果である。そのような中で育った若者が、辻や尾崎のように野で自ら獲得していった知・学と出会っても、その意味や深さを味わえるのかどうか疑問だ。私の高校生時代が恵まれていたのだ、といわれればそうなのであろう。しかし、公教育の場での知・学との出会いが、それを越えた知・学を汲み取ることを可能にさせる重要な契機であることは間違いない。その機会を奪っていく流れに抗していかなくてはならない。

秋山 眞兄



芹田の補修と水入れ

5 月 4 日、水生生物観察用のセリ田に水を入れました。周囲にしっかりと鉄柱を打ち、シカ対策の防獣網をめぐるせました。大人の作業中、子供たちは周囲に生えているセリを中心部に移植する（根ごとひき抜いて田の中央に向かって投げる）はずでしたが、いつの間にかとていづか、やっぱりとていづか、泥合戦に…。大人も巻き込まれて、いっしょに泥まみれになってセリ田を走り回ることになりました。

「身に沁みて白州・GW」報告

私とキララと白州と 坂田裕美

鳥取県生まれ。大学進学で上京し、たまたまアパートの近くだった自然食品店にバイトで入った。そこは白州の野菜を売るお店だった。思い起こせば 9 年前、それが白州との出会いでした。そして気がつけば「青春」時代のほとんどを過ごしているではありませんか。

ぐるぐると目まぐるしい世の中で、ひとつのことを続けることは、けっこうしんどいけどなんだかたいせつな気がして、今はここにいます。この現場は過酷。でも、アナログで時代の最先端な野菜作りや鶏の世界にワクワクしてしまう。食べ物作れるってイカします。しかしそれはやと最近思えてきたところで、実は「ひたすら」体を動かすことが面白かったのです。白州を通して出会った人や大きすぎる自然や汗にまみれていると、まだまだ自分は変わりたいし、知らない自分が発見できるかもなどと思うので不思議です。

キララの子供たちとは畑で過ごすことがほとんどです。自分の思うワクワクが伝わる畑が作れたらなーなどと思いつつ、実際は草ばーばーと一緒に草むしり……汗だくで収穫……

でも草むしりの後の冷たい一杯のお水、おいしいでしょ？
キララに来る子供から村のおばちゃん、同年代の女の子、頼れる兄さん姉さん、年下のおとこの子。ここは様々な出会いがあふれている。

ここへ来る子供たちにもささやかでも、白州の人や自然から宝物が見つかるといいな。

迷ったり、悩んだりしたら、「たからもの」の扉をたたいてみる。ヒントが見つかるときもある。

そんな出会いの交差が、なんか楽しいです。



編集後記

今号では特別に、太田出版・高瀬幸途さんによる、内村鑑三著『デシマルク国の話』の書評を掲載させていただきました。

内村鑑三という骨太な明治の宗教者の理念をひとつの手がかりに、21 世紀の農・環境・地域社会を見つめ直すことは、きららの学校の今後にもそのまま通じるものではないかとわたしは思います。高瀬さん、本当にありがとうございました。 井上忠彦

お問い合わせはお電話か、電子メール info@hakusyu.jp にてお受けします。また右の QR コードを読み取っていただくことで、携帯電話からも「きららの学校」の最新情報をご覧になれます。――→



『デンマルク国の話』（内村鑑三著）をめぐつて

高瀬幸途

2007.04.24



キララのMLに『デンマルク国の話』の読後感を書く前に、昨日、BM技術協会の『アクア』用に短い感想を書きました。スペースが小さいため、圧縮し過ぎて分かりにくいところの多いものになりましたが、それに注記するという形で雑感をまとめてみます。先ず、最初の感想にざっと目を通して下さい。

言論界の寵児であり外務省のラスプーチンと呼ばれる佐藤優の特異さについて、批評家の柄谷行人は「国際政治の現場の経験者、マルクスの思想に詳しい、キリスト教徒である」と指摘しているが、百年ほど前の言論界で重きをなした内村鑑三は「水産・農学に通じたキリスト者」であつた。両者は熱信なる愛国者（国士）の点でも共通している。

明治44年10月、内村が51歳のときの講演記録が『デンマルク国の話』であるが、岩波文庫で16頁の短い話であり専門的内容でないから、是非こ一読をおすすめしたい。

小国デンマークがドイツとの戦争に敗れてさらに狭くて荒廃した国土に追い込まれたとき、憤然として一工兵士官が立ち上がり、広大な荒野を良田沃野に変えるべく、灌漑と植林につとめ、工夫を重ねた拳句にその夢を実現し、世界に冠たる富裕の小国に至つたという概要である。まるで「講談の一席」を聞く趣きがあつて簡明痛快。

真の国力はその国が敗れたときにこそ試され、その力は精神力・信仰に発する、という宗教的教訓話のように受け止められ

特別寄稿

ということに通じているのでは？

明治の初期を生きた人にとって、社会制度は変革可能という共通認識が強くあつたのではないか。あらゆるものが創業創生の時代であり、すべて変更可可能という感覚。変革期とはそうしたものでしょう。西田幾多郎は正規の大学卒業生でなかったが、哲学者として独創的な仕事を残しています。例をあげれば切りがないので止めますが、変革期の中で考えるということは、根底的に考えることにつながります。目の前の国家・制度・常識を肯定してその処理をスマートにできるかどうかではなく、国家・制度・常識を覆し、より「人間的」なより「合理的」なものを構想することがリアルな課題になるわけです。その時にマイナーな私、小さく弱い己（おのれ）を支え導くものが理念（含む神）であり、過去や外国の事跡・実例です。理念が必須なものになります。内村にとって、それは聖書の神であり、小国主義であり、非戦であり、デンマルク国であつたに違いありません。

内村の小国主義は独特のものだと思いますが、やがて石橋湛山の小日本主義（植民地の放棄）につながる面があるでしょう。内村の『代表的日本人』では日蓮が権力に屈することなく宗教的信念を貫いた人として激賞されますが、石橋湛山は日蓮宗本山・身延の管長を勤める家系の出で僧籍を持つ人であつたことは好ましい暗合なのでは。口の悪い椎名さん（白州郷牧場代表：編集部注）からすれば、日蓮や二宮尊徳や西郷隆盛をほめるのは、内村が日本人をローマへ連れて行く陰謀となるかもしれません。

小国主義の系譜は、大日本帝国の敗北を通して憲法9条にも通じていると考えていいかもしれません。その系譜の探索は椎名さんがなさると思いますが、私が興味深いと思うのは、内村が敗北（徳川幕府が明治政府に敗北する、朝鮮が植民地になって日本に敗北する、デンマルクがドイツに敗北する等など）の中で考え続けたことです。宗教的受難（パッション＝情熱）の心性も働いているのでしょうが、一種の科学的精神（仮説↓実験（正誤・失敗成功）↓論証↓再仮説）が伏在しているようにも思えます。

内村の知性の特徴の一つは、つねに実行可能なことを考える点

るし、森林（植林）→環境改善→農業復興→国力増進という農業循環論として読んでもいい。それこそBM協会々員にはうってつけの良書だろう。二宮尊徳の実行力を評して「他人に頼らずとも、我々が神（自然）に頼り己に頼つて宇宙の法則に従えば、この世界を上手に経営できる」実例だと記す内村の面目躍如、といえる話なのではないだろうか。

とはいえ、私はわずかに内村の著作数冊を読んだに過ぎず、キリスト教思想史についても門外漢なので、内容的に踏み込む素養はない。したがつてこの講演の時代的背景についてののみ一言する。

この講演と同じ年の正月には、かつての盟友の幸徳秋水たち12名が大逆事件で処刑されている。前年には日韓併合があり、さらにその前年には伊藤博文が安重根に狙撃されている。幸徳たちと非戦論を掲げた日露戦争から僅々6年、銃に変えて剣をもって平和で豊かな国を作つたデンマークこそ、非戦論の延長に位置する理想の姿であつたろう。しかし、勝手読みをすれば、その理想の姿を一番念願していたのは日本と日本人ではなく、植民地化された朝鮮と朝鮮人だつたのではないか？ 国敗れた国民は何をなすべきか、そして勝利した国民は何をめざすべきか、唇寒い冬の時代の中で、内村はデンマークを範にして、遠回しながら大日本帝国を痛烈に批判しようとした、と私には感じられてならない。

この講演の文庫本に併載されている『後世への最大遺物』の中には「真面目に高尚なる生涯を送ること」が最高の人生規範だという言葉がある。その独立の精神は、どこか孤立の色を帯びている。佐藤優の三つの資質について、柄谷はそれぞれこの国では少数派だと言っている。思想はその本性からしていつの世も孤立の影を落としている、のかな。

（2007年4月23日記）

内村鑑三と佐藤優を並べて論じるのは、派手な感じで人目を引くという軽い理由もありますが、社会制度の崩壊（革命）という激動の中から自分の価値観や知性を磨き上げたという側面で共通

にあるようです。いや、彼にとって考えることは実行可能なことなのです。神の言葉はすでにして聖書に書かれているのだから。田や畑を豊かなものにするこ、樹木・山林を繁茂させること、流域の環境の保全をはかること、農業や地域社会を繁栄させること、内村にとってそれらは実行可能なことであり、実行すべきことなのです。さらに、国家社会、国際社会もまた平和でより平等な、友誼を尊重するものにすべきことなのです。そうした理念と実行の思想を遺していった内村は、私たち、といつても私は年寄りなので遊んでいいのですが、キララの若者諸君、君たちが何をどう実行しているのか、神の国から見つめているのではないのでしょうか。

欲をいえば、デンマルク農業と愛郷塾（橋孝三郎）・雪印乳業との関係や、内村の農業循環論の平板さなどについて触れてみたかったのですが、それはまたの機会にします。内村と佐藤優との共通点を述べるばかり